



Title	中国初期探偵小説論 [全文の要約]
Author(s)	藤井, 得弘
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13407号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74473
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Tokuhiro_Fujii_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：藤井 得弘

学位論文題名

中国初期探偵小説論

論文の問題意識

本論は、清朝末期において、西洋探偵小説が中国へと伝来した経緯を踏まえつつ、当時の中国人がいかなる背景のもとに、西洋の探偵ないしは探偵小説をめぐって何を思い巡らせ、いかにしてそれを自らのものとして生み出そうとしたのかを論じたものである。

清朝末期の中国では、シャーロック・ホームズ物語の翻訳をきっかけとして、探偵小説が一世を風靡する。その背景には、真新しい内容であったこともさることながら、梁啓超らにより唱導された文学革新運動の勃興があった。小説による民衆の啓蒙が唱導されると、探偵小説は、科学知識や論理的思考を涵養する手段であると目された。というのも、西洋探偵小説においては、往々にして、探偵が最新の科学や医学に関する知識や道具を駆使して事件を解決するからにほかならない。もっともそれと同時に、探偵小説は、中国にとっては自国の文明の後進性を映し出す鏡でもあった。

このように、中国における探偵小説の受容と展開は、同国の近代化と深く関わる論題である。しかしながら、探偵小説は、中華人民共和国成立後に批判の対象となり、長いあいだ論じられてはこなかった。研究が進むのは、1980年代に文学史の書き換えが叫ばれ、それまで等閑視されてきた民国期の通俗文学に光が当たってからのことである。

近年では、探偵小説研究も徐々に進められつつあるが、それらにおいては、民国期の隆盛を頂点とする「発展史」的な枠組みのもと、清末期の作品は未熟だと見なされる傾向にある。確かに、巧拙という評価軸のもとに作品を並べるならば、その指摘はあながち外れてはいない。しかし、そのような態度は、西洋で生み出された探偵小説について、中国がいかにしてそれを受け入れ、創り上げていったのかを考えるにあたり、探偵や探偵小説の持つ社会的、文化的な意味といった、中国に固有の問題を、見えにくくする可能性があるだろう。

そのような問題意識のもと、本論では、これまで論じられてはこなかった民国期以前の最初期の創作探偵小説を中心に提起し、個々の作品の分析を通じて、同時期の探偵小説イメージを明らかにするとともに、創作上の大きな趨勢を描き出すことを目指した。

論文の要旨

本論では、清末期の探偵小説を個別に取り上げ、事件と裁きを骨子とする伝統的な公案小説の土台のうえに探偵小説を打ち立てようとする、大きな趨勢があったことを示し（第Ⅰ部「公案小説から探偵小説へ」、第1～4章）、その動きが「ホームズ物語」を模倣しようとする方向性を持つものだったこと、そしてその模倣は中国社会の後進性に根差した大きな困難を伴うものであり、探偵小説あるいは探偵はその後進性を顕在化させるものだったことを指摘した（第Ⅱ部「「ホームズ」を生み出したかった中国人」、第5～8章）。

第1章「公案小説と探偵小説の間で——劉鶚『老残遊記』」では、公案小説と探偵小説の交差を示す興味深い事例として、まず劉鶚『老残遊記』（1903-1906?）を論じた。同小説では、裁判官が主人公の老残を「ホームズ」と名指しして事件の解決役を引き渡すという、公案小説から探偵小説への交代劇を象徴するかのような展開が見られる。その老残が「ホームズ」と称されつつも、物語の最終局面においては、伝統的な公案小説の裁判官・包拯に近い形象を持つことを指摘し、その点から、同時期における公案小説と探偵小説の交差の在り様が窺われることを述べた。

第2章「探偵」の発見——吳趸人『中国偵探案』では、まず、吳趸人による『中国偵探案』（1906）の編集が、翻訳探偵小説礼賛の風潮を批判し、中国の能吏を「探偵」として捉え直す試みであったことを指摘した。また、同書に関する言説を通して、公案小説は探偵小説としてみなし得るのか否か、といった問題が、すでにこの段階で議論の対象となっていたことを確認した。そして、吳趸人が、同時期の迷信排斥の動向を背景として、中国に歴史上実在した人物の事実性のある話を探偵小説として発見した結果として、超自然的な包拯の物語が意識的に排除されているという可能性を示した。

第3章「「探偵」のいない「探偵小説」——周桂笙「上海偵探案」」では、上海の租界で起こった窃盗事件とそれにまつわる裁判を描いた、周桂笙「上海偵探案」（1907）を論じた。まず、周が先行する吳趸人『中国偵探案』について、事実の記録としての価値を認めつつも、「探偵事件」とは呼べないとし、能吏を探偵と見做す吳の編集方針に異を唱えていることを確認した。そして、周桂笙が事実の「記録」を重視した結果、「上海偵探案」に、探偵の探偵らしい話が描かれなかったということを指摘し、その理由として、周が当時流行した「譴責小説」（現状批判小説）のように、上海の租界警察「包探」の「現状」を批判的に描くことによって、読者を啓発し、社会の改良を試みようとしたためだったことを論じた。また、吳と周によって、公案小説は探偵小説と見なし得るのかという問題が顕在化したことを述べた。

第4章「能吏から探偵へ——呂俠『中国女偵探』」では、吳趸人『中国偵探案』のような中国式の「能吏伝」から西洋式の探偵小説への「跳躍」を志向した作品として、呂俠『中国女偵探』(1907)を取り上げた。具体的には、同小説を構成する「血帕」「白玉環」「枯井石」の3篇の小説について順を追って分析し、それを踏まえて、これらが階層性を持っていることを指摘した。同小説は、複数の女性たちが新小説の話に興じるところから始まり、最初の2篇は彼女らによって語られる。最初に、第1篇が吳趸人『中国偵探案』のような能吏の活躍する話であり、女探偵が活躍する第2篇に移行するための大掛かりな「入話」として機能していることを指摘した。続いて、第2篇が「中国の女シャーロック」と称される女探偵が事件を解決する話であり、第1篇と並べた際に、男と女、能吏と探偵、旧と新といった複数の対立項によって対置させられていることを述べた。最後に、第3篇ではこれまで語り手だった女性たちがみずから事件の解決に乗り出していることを指摘し、同小説が、読者のいる現実世界と物語世界という階層性をメタフィクショナルに反映させた構造になっていることを論じた。また、第3篇の探偵役だけが専門的な科学知識を備えていることを述べ、同小説の持つ階層性が、吳趸人『中国偵探案』のような中国式の「能吏伝」から、西洋式の「探偵小説」への「跳躍」を志向するものであることを明らかにした(以上第I部)。

第5章「茶花女」と恋に落ちた「ホームズ」——天民「失珠」では、天民「失珠」(1908)を取り上げ、同小説が、清末期にもっとも流行した翻訳小説である、「ホームズ物語」と『椿姫』を合わせたような構成になっていることを示した。そして、それが単に模倣と呼びうるようなものではなく、西洋小説のような話を創り上げようとした結果として、主人公とヒロインが中国では当時実現が困難だった「自由恋愛」や「自由結婚」をするといった展開が要請されることとなり、物語世界が現実世界とは距離のあるものとなっていることを指摘した。

第6章「科学技術と初期探偵小説創作のジレンマ——傲骨『砒石案』」では、傲骨『砒石案』(1908)を取り上げ、まず、主人公が中国で最初の探偵であることが示されており、西洋探偵小説を「教科書」として探偵術を学ぶ「初学者」として造形されていることを指摘した。続いて、作中に見られる、指紋を顕微鏡で確認するといった捜査方法について、それが1908年時点の中国では実現し得なかったものであることを述べ、先行するホームズ物語などの翻訳小説を参照している可能性を示した。そしてこの点から、清末当時、西洋探偵小説は科学技術や司法制度の「教科書」として読まれていた一方で、中国の後進性を露わにするものでもあったことを示した。また、小説中に事件を小説に仕立てる書き手が登場する点についても、同時代におけるホームズ物語のイメージを踏襲するものであることを指摘した。

第7章「処方箋としての探偵小説——傲骨『鴉片案』」では、前章で取り上げた『砒石案』の続編『鴉片案』(1908)について、同時代におけるアヘンの害悪を描いたその他の小説と比べつつ、譴責小説との類似点と探偵小説としての特質を論じた。具体的には、前作から探偵が成長していること、そしてその成長から、同時期の探偵小説イメージ、ひいてはその創作の志向性が窺われることを述べた。本シリーズの探偵は、前作では西洋探偵小説から探偵術を学ぶばかりであったが、『鴉片案』では、中国は欧米とは異なるという認識のもと、中国の風習や「社会心理」を学び、それを調査に活かしている。さらに、事件の最終的な解決において、探偵は個人の能力を発揮するだけでなく、海外留学経験をもつ友人の協力を得ている。このような探偵の成長および事件の解決の在り方について、中国社会が「病態」から回復するための「処方箋」として読み得ることを論じた。また、それを踏まえて、譴責小説の役割が、社会の現状の暴露、言い換えるならば「病状の指摘」であるのに対し、『鴉片案』では、その先の「治療法の提示」までなされていることを指摘し、その点にこそ両者のジャンルとしての特質の違いが窺われるということ述べた。

第8章「探偵の機能と透視の道具——南風亭長「羅師福」」では、南風亭長「羅師福」(1909-10)を取り上げ、探偵が捜査において、顕微鏡やX線由来の透視の道具など、肉眼では見えないものを読み取る機械を用いることに注目し、その由来を論じるとともに、それをを用いる探偵が、事件の真相のみならず、社会の現状をも暴き出す役割を仮託された存在であったことを指摘した(以上第Ⅱ部)。